

デンタルダイヤモンド／2015. 3月号

○実践歯学ライブラリー：唾液分泌量の減少を見落とすな！（岩淵博史）

*唾液量の減少は、多くのトラブルを招くことはご存じのことと思います。ドライマウスには、1. 口腔乾燥感の訴えはあるが、多量的に口腔内の感想を認めないタイプ、2. 口腔内の保湿度が低下したタイプ、3. 唾液の分泌量が減少したタイプ、があります。1. は心因性などと言われてきましたが、実はガムテストなどでは正常範囲内でも安静時の唾液量が減少していたり、わずかな唾液腺の機能異常がある場合が認められる場合があります。2は筋力低下による開口や口呼吸で起きる。3は体液量の減少が原因の場合と唾液分泌機能の低下が原因の2つ場合があることを示しています。本稿では、唾液分泌量減少症の症状、唾液分泌量減少が起きた時に起きる弊害、対応法について詳述しています。患者さんの訴えが理解できる内容です。是非お読みいただきたい内容です。

○D d 歯科麻酔学セミナー：歯科用局所麻酔剤のベストチョイスとは？

（見崎 徹・北川 尚・三輪全三・元橋功典）

*現在、日本の歯科用局所麻酔剤としては9割強がアドレナリン添加のリドカイン製剤が使用されていますが、高血圧・糖尿病・甲状腺機能亢進症などの患者さんには原則禁止です。プロピトカイン製剤（シタネストーオクタプレッシン）はオールマイティに使えるが、リドカイン製剤と同量では効きづらいこと、メピバカイン製剤（スキャンドネスト）は、血管収縮薬や添加剤が入っていないメリットはあるが効果時間が短いことが特徴です。小児は30分で治療を終えるように計画することから、スキャンドネストが推奨されます。これによって、咬傷のリスクが軽減できます。障害者には、治療時間や処置内容によってリドカイン製剤かスキャンドネスト製剤を使い分けます。一般の患者さんでは、持病と処置時間で麻酔薬を選択しますが、シタネストには防腐剤が添加されているのでアレルギーの可能性があり、可能ならスキャンドネストが第一選択と考えられます。是非、ご一読ください。

歯界展望／2015. 3月号

○集中連載ビスフォスフォネート製剤に起因する顎骨壊死と歯科治療（第一編）

（長崎大学 黒嶋伸一郎・澤瀬隆）

*BP製剤に起因する顎骨壊死（ONJ）には注意するべきだと、誰もが認識しているものの、実際にはどのような点に留意して歯科治療を行えばよいかは、十分には理解されていないことも現状と思われる。今回はBP製剤とONJに関する基礎的な知識の整理を目的としている。次回から具体的な対応方法について連載される。日本の高齢化の進み具合は、世界に類をみないスピードである。したがって今後も骨粗鬆症患者が増加することは想像できる。骨粗鬆症の治療は薬物療法が中心であり、使用頻度が最も高いのがBP製剤である。今後もBP製剤を服用する患者が増加することも明らかである。したがってONJの発現も増加の可能性がある。さらにONJの発現頻度や抜歯との関係、リスク因子についても述べている。

ザ・クインテッセンス／2015. 3月号

○歯周組織再生療法の可能性と挑戦 術前診断の着眼点と臨床手技

第1回 骨縁下欠損に対する再生療法（北島 一）

*本連載では、3回にわたり、①骨縁下欠損②唇頬側における裂開状骨欠損③骨縁上欠損の各欠損形態に対する再生療法の治療例を呈示し、再生療法の可能性について考察していく。今回の骨縁下欠損では骨壁数、ポケットの深さなど局所因子のマネジメントを症例ごとに図と写真で術式についてもわかりやすく解説してくれている。そして以下はまとめである。再生の可能性は隣在歯隣接面の骨壁の高さに依存し、欠損深さの平均7～8割の改善が期待できる。垂直的骨吸収の骨欠損形態であれば深い骨欠損だからといって保存を諦める理由にはならないといえる。

○地域包括医療モデル「柏プロジェクト」に参加して（黒滝義之）

*「柏プロジェクト」とは平成21年に始まり、平成27年度から全国で行われる在宅医療・介護連携推進事業のモデルとなるプロジェクトである。その中で、柏市は規制緩和を「総合特区」で申請し、歯科衛生士による訪問口腔ケアについては、歯科医療機関から離れた場所からの居宅療養管理指導を行うことが可能になった。しかし、事業所としてのステーション化は認められず、柏歯科医師会が設立した「口腔ケアセンター」は事務所であり保険請求ができないことから、歯科衛生士は歯科医療機関（協力医）と雇用契約を結ぶ必要が生じ、事務作業が煩雑になってしまった。今後、他職種が同じ場所で活動するステーションが必要ではと提言している。

○急性期に歯科は何ができるのか（館村 卓）

*他職種協働における歯科医療の目的は①誤嚥性肺炎の予防②口腔機能の維持・回復③経口摂取を支援して、栄養吸収機能を維持・改善することで、サルコペニアとフレイルティを防止して、生活参加を支援することであり、中心となるキーワードは口腔衛生と口腔機能である。急性期における歯科の目的の一つとして、回復期への早期の移行を促すために、非経口摂取であっても摂食咀嚼嚥下機能維持のための介入を挙げている。

日本歯科評論／2015. 3月号

○＜特集＞ 超高齢社会におけるドライマウスへの対応（斎藤一郎 中村誠司 他）

*いわゆる「ドライマウス」の患者さん以前より増えている感じがしませんか。そしてその対応に苦慮していませんか。特に高齢者になるほど「ドライマウス」は増えている傾向にあります。本特集は超高齢社会を迎えるにあたり「ドライマウス」に焦点をあて、検査と診断、そしてその対応の仕方などを詳しく述べています。この機会にドライマウスについてしっかりまとめて超高齢社会に対応していきましょう。

○適合を追求し、人間の感性を活かした CAD/CAMによる総義歯製作について

（折居雄介・阿部二郎 他）

*CAD/CAMにより技工士さんの仕事の内容が一変しました。そして昨年小臼歯のハイブリッドセラミックスのCAD/CAM冠が保険導入され、その技術は一気に広がった感があります。そしてついに義歯をCAD/CAMで作成するところまでになりました。まだ他にクリアーしなければならないことが多々ありますが、誤差の少ないCAD/CAMデンチャーの実用化までまもなくです。